

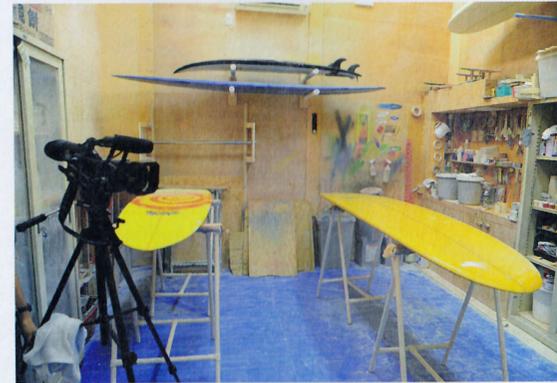


今村さんの自宅で。
相棒のビデオカメラや、
撮影道具と。

ひびきあう

伝える・伝わる映画を

映像作家・今村彩子さん



この夏完成予定の『珈琲とエンビツ』の舞台となる
静岡県湖西市のサーフショップと浜辺。

さまざまな立場の人がその人らしく生きることでできる、垣根のない、暮らしやすい社会を……。映像作家の今村彩子さん（31歳）が、作品に込める思いだ。自らも、生まれつきのろう者として、音のない世界で生きる人たちを撮り続けている。

「ろう者と聴者が共に気持ちよく生活する姿を知ってもらいたいと、ドキュメンタリーを撮り始めました。彼らの言葉や表情から、活字だけではわからない思いが伝わるのが、映像の力だと思います」と今村さん。

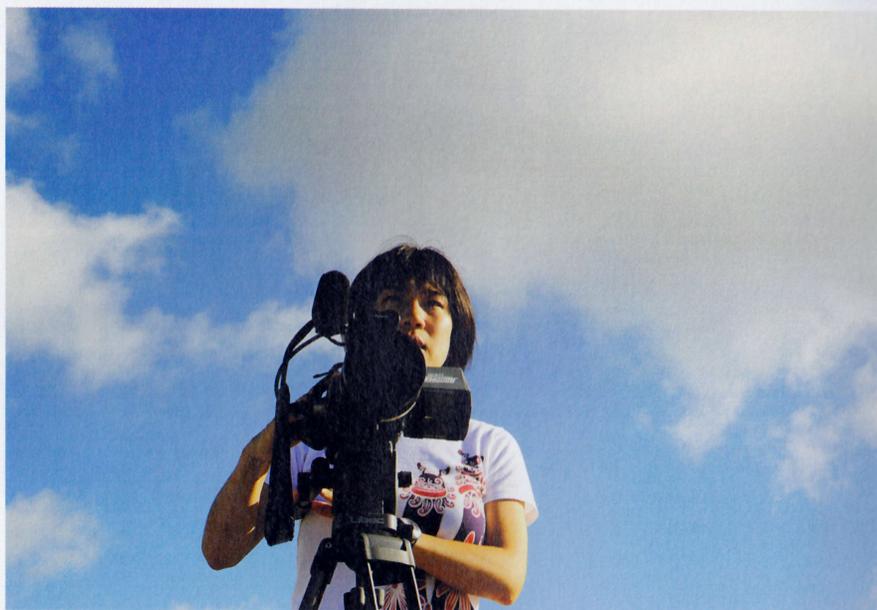
映画監督を目指すきっかけが生まれたのは、小学生のとき。テレビを楽し

めないでいると、父の敏雄さんが、字幕つき洋画のビデオを借りてきてくれた。どんなに嬉しかったか。希望でいっぱいになった。

「小学校でも苦勞が多かったのですが、映画を観てたくさんの勇気をもらいました。次第に私も、周りの人に元気を与える映画をつくりたいと思うようになったのです」。手話を交えながら生き生きと語る。

映画制作を学ぶため、手話通訳派遣制度のあるアメリカの大学に留学。聞こえる、聞こえないに関係なく、一緒に学べる環境は新鮮だった。帰国後、愛知県の大学の講義に手話通訳を要望。多くの人の協力で導入されたが、このようなサポートシステムのある一般学校はまだ少ないという。

2005年、映画制作会社「Studio AVYA」を設立。短編も含めると、ろう者の生活をテーマに撮った作品は25本ほどになる。



この夏完成予定の最新作『珈琲とエンピツ』の主人公・太田辰郎さんは、静岡にあるサーフショップの店長。4年前、高校時代からの夢であった自分の店を開いた。

「耳の聞こえない太田さんが、お客さんどう接しているのだろうと思って訪ねたのが2年前。すると、日焼けしたサーファーたちと、筆談や身振りで楽しそうに話していました。それは、違う国の人々が気持ちを伝え合おうとしているようで、撮りたい、と強く思いました」。

太田さんは、お客にハワイの珈琲を淹れて出し、しぜんに会話が始まる。「珈琲もコミュニケーションのひとつ」と、映画のタイトルが決まった。

それまでは、手話ができない人とはあまり積極的に関わらなかつたという今村さん。自分も太田さんのようになりたいと、その後、地方での講演も含め、たくさんの人と話すようになり、交流は広がっていった。

「メディアを紹介して、ろう者や手話について知る機会が増えましたが、実際に会うとコミュニケーションのとり方がわからず、戸惑うかと思えます。でも、方法はいくらでもある。一番大切なのは、伝えたい気持ちです。映画を観た人がそう感じてくれたら嬉しい」と朗らかに語った。

撮影／玉置雄（11、12ページ）
橋本桃（10、13ページ）
文／編集部



取材中に。「太田さんの笑顔は日本一!」というお客も。